竹取物語

大河内健詞

［登場人物］
稚児
乳母
竹取の翁
翁の妻
かぐや姫
隣の翁

乳母　若様、まだお休みになられませぬか。はや四つ時になりぬ。
稚児　今宵、なぜか気もそぞろなりて。ばあやよ、何か面白き物語りを聞きたし。
乳母　左様なりか。さらば、竹取の翁の物語をお聞かせつかまつらん。
稚児　竹取の翁の物語とな。面白そうなり。聞かせたまえ。

乳母　今は昔、竹取の翁といふものありけり。
野山にまじりて、竹を取りつつ、よろづの事に使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

（竹を持った翁登場）

乳母　さて、よろづの事とは何ぞや。
すべからく、そのまま肩を叩いてもよきことなれど、
例えば竹の節に穴を穿ち、これを水筒として用いらる。
また、竹を半分に切り、素足で踏めば大変気持ちがよきに候。
さるは、竹を細く切らば、これは耳を掻くのに具合よきに候。大変気持ちがよきに候。
端の部分は、洒落たる小物入れとせば、竹の余す所無し。
竹を知り尽くしたる翁は、竹のみで作られた家に住み、竹の繊維の衣をまとい、竹の器で竹の子を食す。
やや、くせ者か。翁は竹やりを取りて、一撃にして仕留める。
一仕事終えた後には翁の唯一の楽しみである酒盛りが始まる。
翁は巧みなる竹芸にて笑いを取り、取れずともめげることなく力技で席を盛り上げ、
その場に好みのおなごいれば、すかさず竹に恋文をしたため、
ふられたらば、竹を恋人の代わりとし、嫌がる竹を強引に

（この間、翁は乳母が言ったことを表現する）

稚児　竹、竹、竹！　竹の話はもうよい！
乳母　竹はいと使い勝手よきに候。
稚児　それは十分わかった。われは本筋を聞きたし。
乳母　左様なりか、では・・・
その竹の中に、本光る竹なむ一筋ありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。
それを見れば、三寸ばかりなる人、いと美しうて居たり。
翁言ふやう、「子となり給ふべき人なめり。」と。

乳母　さて、なにゆえに、翁はかかる怪しき子を、己の子とせんとしたか。
それは翁に子がおらぬ故なり。翁には明菜といふ妻侍りしが、子宝に恵まれじ。
その由、定かにあらざれど、いかで子を授からんと、よろづの手を尽くしたれども、え授からじ。
世間は明菜を白き目で見、姑との関係もやうやう悪しきものになりつ。
明菜は己の理解者たりとて翁に依存すれど、かかる明菜を翁はいと疎ましう思い侍り。
つひに、明菜と翁の関係よに悪しきものになりつ。
明菜は新しき宗教に頼り、翁は稚児にあさましき思ひを抱くこと

（乳母はときどき明菜と翁を間違える）
（翁と妻は小芝居をする）

稚児　もうよい！　かかる重き話は聞きとうない！
乳母　左様なりか。若様には、ちと、早からんか。ほっほ。
稚児　また、翁と明菜が紛らわしく。
乳母　ならば、明菜はアッキーナとせん。
稚児　どちらでもよし。ささと続きを。
乳母　左様なりか。では・・・
翁、手に打入れて家に持ちて來ぬ。いと幼ければ籠に入れて養ふ。
さて、すべからくこの籠は竹で作られ、竹のよき風合いを生かしながら、軽さ、適度なる伸縮性を備えたる
翁の竹籠は、都でも評判
稚児　竹はよい！　竹は！
乳母　左様なりか。では・・・
この児（ちご）、養ふほどに、すくすくと大きになりまさる。
かたち清らなること世になく、いと大きになりぬれば、
名をば、なよ竹のかぐや姫とつけつ。

（成長したかぐや姫が登場）

乳母　さて、翁らはなにゆえにかぐやと名付けしか。
そも、翁は男子を欲するによりて、竹史（たけし）と名付けんとすれど、
明菜、もとい、アッキーナ、「否（いな）。おなごにたけしと名付けんとはこれいかに。許さじ。」と。
翁、「せんなし。竹子（たけこ）とせん。」と。
アッキーナ、「安直なり。なほわろし。さらに字画九画とは、これ苦しみの九にして大凶なり。」と。
翁、「ならば、異国風にて萬武有（ばんぶう）とせん。これぞ今様（いまよう）なり。」
アッキーナ、「かたはらいたし。それなむ、どきゅんねえむ、とぞいふなり。まさに忌むべし。」
翁、「ならば、取っておき。「平成」はいかに。」
アッキーナ、「訳がわからぬ。死すべし。」
翁、ますおさんの体（てい）にて「ええ〜！？」
アッキーナ、「下らぬ。死すべし。」
翁、「ぷんぷん。うぬれはいかに。」
アッキーナ、「我から一文字とり、裕子とはどうじゃ。」
翁、「ずるり、とっておらぬ！」
アッキーナ、汚き物のように翁を見る。
そこに隣の翁うち入りて、「伽具俔（かぐや）がよかろう。」
「ああ〜ああ〜ああ〜」（すごく納得した感じで）
といふ訳なり。

稚児　おいおい、おいおい・・・
乳母　やや、泣きにけり。これいかに。
稚児　われ本文が、本文が聞きたし〜！（わめく）本文〜！　本文〜！　余計なる解説は要らぬ〜！
乳母　おお、おお、わかりもうした。では、辛亥革命をば起こさん。
稚児　それは孫文！
乳母　わかっておる。では、本文。
さて、世界のをのこ、貴（あて）なるも卑しきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、
見てしがなと、音に聞きめでて惑ふ・・・（止まる）
稚児　ん？　ん？
乳母　続きを、忘れけり。
稚児　あな！
乳母　いやいや大した話にあらず。何かかぐや姫が月に帰るとか、そういうあれなり。
稚児　何とぞんざいな！　かつ、ネタばれ！
乳母　（しまった、という顔）さあ、子は早う寝るべし。続きはいつか思い出さん。
稚児　あわれかぐや姫、顔出しもせず・・・

乳母　　左様ならば若様、お休みなされ。（退出）

稚児　　何ともはや、口惜しけれども、みんな（翁たち）、また逢はばや〜。

（かぐや姫はとても納得いかない様子だが、翁たちがなだめて、いい感じに手を振りながら暗転）